

「令和6年度 次世代総合教育会議」

開催日 令和6年8月22日（木）13:00～15:00

開催場所 ザ クラウンパレス新阪急高知 3階「花の間」

(司会)

それでは定刻となりましたので、ただ今から「次世代総合教育会議」を開会いたします。

私は、本会議のファシリテーターを担当いたします高知県教育委員会事務局参事の鈴木と申します。よろしくお願いします。

本日の会議では「高知県、日本の未来を考えて理想的な学校の姿とは」というテーマに基づき、県内の高等学校・特別支援学校に在籍されている5人の委員よりご発表、意見交換をしていただければと考えております。

それでは開会にあたりまして、濱田知事からご挨拶を申し上げます。

(濱田知事)

皆さん、こんにちは。本日は皆さん大変お忙しい中「次世代総合教育会議」にお集まりいただきまして、ありがとうございます。また、高校生の委員の皆さまにはこれまで本日の発表に向けまして、さまざまな準備を重ねていただいたとお聞きしております。お忙しい中どうもありがとうございます。

さて、この総合教育会議でございますが、元々は、教育委員と知事との間で定期的に行われております。本県の教育をどう進めていくか、特に県立学校の運営をどうしていくかということに関しては、常日頃、県の教育委員会を中心に議論をいただいて決定しておりますが、特に県政全般の管理運営に責任を持つ知事といたしまして、年数回程度は教育委員の皆さまと席を同じくいたしまして、県の教育、何を目指していくのか、また、今何を重点的に進めていくべきなのか、といった議論をさせていただいています。

これに加えて、昨年、この「次世代総合教育会議」と称して、高校生の皆さんのご意見を直接お聞きする場を設けることにいたしました。「こども基本法」も制定をされまして、子どもの声をできるだけ県の行政にも幅広く反映をさせていく。そのためにも、こうした機会を設けて高校生の皆さんの、いわば現場の生の声を聞かせていただくということで、こうした取り組みを始めたところでございます。

本年度もこうした形で高校生の委員の皆さんの考えを直接お聞きできる機会を得られましたことは、私としては、非常に楽しみにしておりました。常日頃こういった機会がなかなかないものですから、今日はどうか忌憚のないご意見をお聞かせいただければと思います。

今後も皆さん方からお聞きしたご意見を基にいたしまして、高知県の場合は4年ごとに教育大綱というものを設けて議論をし、決定をしています。

昨年もその議論をしてきた中で、高校生の皆さんのご意見も踏まえて、特に教育大綱の中でどういう学校教育を目指していくか、そうした中で、例えば不登校は問題行動ではないというような位置づけを明確にしたり、あるいは、特に多様性を大事にする、そうした包摂性を大事にする教育、といったものを新たな視点として大事にしていこうといった方向性を示したり、こういった形で高校生の委員の皆さんのご意見も踏まえながら、新しい方向をこの会議を通じて決めてきたというところでございます。

本日は、そうした議論の一環として皆さま方の常日頃学校に通いながら、さまざまな高校教育、特別支援学校の教育でお感じになっていること、あるいは学校はこうあってほしいという生のご意見をお聞かせいただきまして、今後の議論の参考にさせていただきたいと思っております。

どうか忌憚のないご意見をいただくことをお願い申し上げまして、私からの開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

(司会)

ありがとうございました。最初に本日ご出席されております高校生の委員の皆さまのご紹介を私の方からさせていただければと思います。発表順にご紹介をさせていただきます。

まず、高知国際高等学校の澤田千代子委員です。続いて、高知農業高等学校の坂本琉恋委員です。続いて、高知若草特別支援学校の小松璃沙委員です。続いて、土佐塾高等学校の田中達仁委員です。最後に、檮原高等学校の石原憧真委員です。本日は委員の皆さま、よろしくお願いいたします。

それでは、早速意見交換の方に入らせていただければと思います。まず、本日の流れをご説明させていただきます。冒頭ご説明いたしましたテーマの「高知県、日本の未来を考えて理想的な学校の姿とは」というテーマにつきまして、本日各委員の皆さまからご発表いただければというふうに思っております。

お一人の委員の方がご発表されましたら、そのご発表に対しまして、ご感想やご質問などがないかを、残りの4名の高校生の委員の皆さまに、まずはお伺いさせていただきます。その後、高校生の委員以外の本日ご出席の知事、教育長、また、教育委員の皆さまから何かご感想などがありましたらいただく形にさせていただきます。お一人のご発表と、それに対する意見交換が終わりましたら、また、次の方のご発表と意見交換に移らせていただくという流れにさせていただければと思います。

それでは、早速、ご準備がよろしければ、1番最初の発表者でございます高知国際高等学校の澤田千代子委員、ご発表をお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

【発表】

◎高知国際高等学校 澤田 千代子 委員

それでは、これから高知国際高等学校の発表を始めさせていただきたいと思っております。高知国際高校2年の澤田千代子です。よろしくお願いいたします。

まず、高知国際高校について簡単に説明していきたいと思っております。高知国際高校は2021

年に開校し現在4年目です。私たちは、Think Globally Act Locally をキャッチフレーズとして地球規模の視点を持ちながら、自分に何ができるのかを考えて行動することを目標として学んでいます。本校には普通科とグローバル科があり、グローバル科の中には探究コースとDPコースが設置されています。私はDPコースに所属しています。

高知国際高校は西日本の公立校で初めて中学、高校ともに国際バカロレア校として認定された中高一貫校です。特長的な活動としては、中学3年生から高校3年生までが縦割りゼミ方式で探究活動に取り組むゼミ活動というのがあります。7月には、代表者がオレンジホールで発表する国際シンポジウムも行われています。

それでは最初に学校のいいと思うところを説明していきたいと思います。多様性が認められやすいということはもちろんですが、学習においては「学び方を学ぶ」ということを実践していることです。「学び方を学ぶ」ために実践していることが三つあります。

一つが国際バカロレアが示している10の学習者像です。探究する人やバランスのとれた人、挑戦する人などがあります。

二つ目が探究、行動、振り返りの学習のサイクルを意識することです。ゼミ活動などの探究活動においてこれらを意識しています。一方通行ではなく、行動がうまくいかなかったら探究にまた戻るといふこともします。

三つ目は、ATLスキルです。この中には、振り返りスキルや転移スキルなどがあります。学習のサイクルを進めるにおいてこれらのスキルを意識しています。この三つを通して自立した生涯学習者になることを目指しています。

いいと思うところの三つ目は、課外活動への積極的な取り組みです。Service as Action 通称SAというIBの教育プログラムがあります。これは一般的には、社会貢献活動と呼ばれ全校生徒が取り組むことになっています。例えば防災イベントの開催や鏡川の清掃、学校説明会の運営補助など、学校内外においてさまざまな活動を自発的に行っています。

次に変えたらよくなると思うところを三つお話します。

まず「インターネット回線」です。日常的につながりにくいときがあり、中3から高3まで約900人が調査だけでなく、共有してまとめたりするゼミ活動の時間などは特につながりにくくなります。これによってスムーズな学習ができなくなっていると思っています。

次に「課外活動の支援体制」です。学校側からの資金援助はありません。イベントを開催しようとする则会場費や準備費がかかり、活動拡大や報告のためには、ポスターやチラシの印刷代などがかかります。これらを補うためには外部に頼るしかなく、現在「こうちこどもファンド」などに応募している団体が多くあります。しかし、外部とやり取りしながら活動を行っていますが、応募するためには時間と労力がかかり活動を始める壁になっていると感じています。

三つ目は「授業と試験とのつながり」です。授業は主に探究型で行いますが、試験は知識問題が多く、各自で知識の定着の勉強をする必要があります。

これらを通して、最後に私が考える理想的な学校の姿をお話しします。

一つが「効率的で効果的な探究活動」です。インターネット回線の改善により時間の無駄なく効率的な活動をし、さらに学年を超えて協働で編集しながら進めていくなど、効果的な学習ができるということです。

二つ目は「地域との関わり、つながり」のある学校です。地域と関わる活動というのが本校では少なく、課外活動を進めるのには壁があるという状況です。これらを改善していくことで地域に信頼され、学校だけでは学べない、さらに幅広い社会的な学習を進めていくことができると思います。

最後は、生徒が「積極的に物事に取り組める」学校です。授業と試験とのつながりが十分ではないと言いましたが、私たちは探究活動を通して学び方を学んでいます。3年生になり受験に対応した授業が増えたときにも、それまでに学んできた学び方を生かして、どう勉強したらいいのかなどを考えられるようになると思います。私たちの探究活動の捉え方を少し変化させるだけで、生涯の強みになっていけると思っています。

このような学校になれば私たちが掲げているキャッチフレーズの Think Globally Act Locally にある国際的に活躍する人や、地元のために働ける人に成長していけるようになると思っています。これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

(司会)

澤田委員ありがとうございました。効率的で効果的な探究活動、そして地域との関わりつながりを持つこと、そして生徒が積極的に学習に取り組む、そのような学校が理想的な姿と。そのためにも、ネットワーク環境ですとか、また、課外活動の支援体制、そして、授業としての在り方などを変えたらいいいのではないかといったご発表をいただいたかと思っています。

それでは、まず、高校生の委員の皆さま、ただいまの澤田委員のご発表につきまして、感想または、ご質問などがある方がいらっしゃいましたら、手を挙げていただければと思います。石原委員お願いします。

(石原委員)

学び方を学ぶとか、すごく斬新なアイデアでいいことだと思いました。また、多様性が認められやすいといういいところがあったと思うんですけど、こういった特徴があって、多様性が認められやすいのかを教えてほしいです。

(澤田委員)

本校では県内に先駆けて、女子のスラックスの導入やポロシャツを制服としたというところが大きく挙げられると思います。女子がスラックスをはいたり、夏にはほぼ全員がポロシャツを着ていたりというような進んだ学校、少し県内でも進んだ制服の在り方などを実現しているところが、多様性が認められやすいという部分に挙げられるかと思います。

(石原委員)

ありがとうございます。

(司会)

坂本委員、よろしいですか。

(坂本委員)

地域とのつながりが大切と言っていましたが、具体的にどんなことをして、地域とのつながりを築いていこうと思いますか。

(澤田委員)

私の個人的な活動の話になるのですが、私は地域と防災をつなげて活動をしていて、SA活動の説明のときにも挙げたような防災イベントを開催しています。そのときには、日々校内に入ることのできないような地域の方々もお呼びして、学校に入ってもらって、学校を見てもらったり、その他の活動を見てもらったりという機会を設けるようにしています。

(司会)

ありがとうございます。他の高校生の委員の皆さまいかがですか。ご質問やご感想、もしあればいただければと思います。よろしいですか。ありがとうございます。

それでは、高校生の委員以外の皆さま、知事、教育長、教育委員の皆さまからご感想等ございましたら頂戴できればと思いますがいかがでしょうか。池委員お願いいたします。

(池委員)

皆さん、こんにちは。教育委員の池と申します。まず、澤田委員さんのご発表、非常にまとまりが良くて、分かりやすい説明だったし、論理構成も素晴らしかったと思います。それから、高知国際高校は、主体的で対話的で深い学びを実践している学校で、これはそれ以外の高等学校、あるいは他の小中学校も含めて、モデルになる学校だと思います。とてもよい教育ができているなと感じました。

発表の内容の中で、改善したい点について3点お話があったので、自分の考えですけれども、何か役に立てればと思ってお話をさせていただきたいと思います。

まず、一番初めは、アクセスが集中してトラブルが起こってしまうという課題が探究活動などであるというお話をされました。施設設備については、学校の設置者である県の教育委員会であるとか、あるいは高知県が責任を持って対応していかなければならない内容だと思います。不具合など、原因などをしっかり探って、改善をしていくように努力をしていきたいと思っています。

加えて、学校や皆さんにもお願いしたいことがあります。それは集中と分散です。集中することが一つの原因であると考えれば、分散をすること、澤田委員さんの回答の中にもあったのですが、やはり場所の問題であったり、時間を分散したりするなど、そういった工夫もしていただくと、非常にありがたいと思います。

それから二つ目は、課外活動への高い壁があるというお話がございました。これはなかなか放課後の時間とか、休日を使って、社会地域貢献活動をするということは非常にありがたいことで、それ自体、本当にうれしく思っています。

ただ、コストの面とか、時間の面とか大変な思いがあると思います。一つは、学校運営協議会というものがあります。そこには地域の方々や民間企業の方、それから、大学の先生、業者の方もよくおいでるわけで、その方々は学校の教育課程について、あるいは教育活動について評価をしていただいたり、提言していただいたりするお仕事なんです。ただ、やはり専門分野をお持ちの方々なので、きっと社会と学校をつなげてくれる役割を果たす、よりコストがかからずに、色々な場面で、社会的貢献ができるような形になる可能性があると思います。コミュニティ・スクールと言いますが、その活用をちょっと考えていただいたらどうかと思います。

それから、ICT の活用です。これは東京都知事選なども見ていたら分かると思いますが、本当に ICT の力はものすごいものがあって、世界中の方と会話ができるというメリットがあると思います。ただ、情報モラルの問題があるので、これはやはり先生方とよく話し合った上で、ご指導もいただいた上で、ICT 活用をしていくと時間もコストも削減できるのではないかと思います。

それから三つ目は、素晴らしい探究活動をなさっておられるんですが、その探究活動の中に、澤田委員がおっしゃられたように地域の課題ですね。例えば南海トラフ地震に対応する防災の対策について、探究型の研究をして、それを情報発信するとか、あるいは少子高齢化で、高知県をはじめ日本中困っているんですけれども、例えば若い女性が住みたいと思うような町づくりについて研究をしていただいて、情報発信していただければ、それはものすごい社会貢献になっていくと感じます。

それから、最後に探究的な授業と、その知識を問われる試験等とのギャップをどう埋めたらいいかという話があったと思います。これはご本人も分かると思いますが、基礎的な知識は非常に大事で、それがなければ、立派な探究活動もできないし、討論もできないと思います。ですから、それをどうするかということで、学び方を学ぶということがありましたけど、自分が一つ思うのは、授業の前に教科書を読むことです。それは、毎日毎日手前に読むということではなく、まとめて読んでいいんですが、やはり教科書を読んでから授業を受けることで、先生が何を伝えたいのかがよく分かるし、生徒同士でグループ討議をするときもぶれないで進めることができると思います。

もし、授業のときに分からない点、何が大切だったのだろうと思ったら、やはり振り返りで、もう1回教科書を読むということが大事かと思います。教科書というのは素晴らしい参考書です。学校の試験も全部教科書から出ますし、それから大学入試も教科書の内容から問われるようになっているので、ぜひ教科書を大切にしてくださいというのが一つの方法かと思います。

参考になれば。

(司会)

ありがとうございました。その他、ご出席の皆さまで何かご感想・ご質問等ありましたら、いただければと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、ありがとうございました。それでは改めまして、澤田委員に皆さま拍手をよろしくお願いいたします。

それでは続きまして、高知農業高等学校の坂本琉恋委員、ご準備が整いましたら、ご発表をお願いいたします。

◎高知農業高等学校 坂本 琉恋 委員

高知農業高校2年生の坂本琉恋です。まず始めに、私が通っている高知農業高校の説明は、スライドの初めにまとめたので後でご覧ください。

高知農業高校のいいところは、農業に関する専門学科別にクラス分けがされていて、自分が学びたい分野についての専門的な授業を受けることができます。そして、3年間クラス替えがないのでメンバーが変わらず、より仲が深められます。

2年生になれば、コースに分かれて授業を受け、大学へ行きたい人は進学コースへ、より専門的な授業を受けたい人は専門コースを選択できるなど、自分の進路に合わせて決められることも魅力です。実習などの授業では、いろいろな体験をすることが多く、これらの経験によって、自分自身の向き不向きや、やりたいこと、できればやりたくないことなどが分かってきます。この経験を進路選択に大いに役立てられることも大きな魅力です。

次に、高知農業高校の変えたらよくなることについてです。

一つ目は、私は食品ビジネス科に所属していて、実験や実習などの作業をすることがあります。ですが、ほとんどの授業は先生が説明をして、生徒は聞くだけの時間が半分以上を占めています。説明を聞いただけで全てのことを理解できる人は、あまりいないと思いますし、説明を聞いているだけだと頭の中で別のことを考えてしまったり、眠くなったりして、授業についていけなくなってしまいます。

なので、昨年度の会議でも出ていましたが、グループワークなどの時間を積極的に増やすなどして、体験型・参加型の授業に力を入れたらいいと思います。

二つ目は、社会に出たら自分と異なる年代の人と関わることになりますので、自分と違う年齢の人との話し方を高校生のうちに身に付けることが必要だと思います。また、初めの人とたくさん関わることで、自分が考えもしなかったアイデアが浮かんだり、次は何を話したらいいか、どんな言葉を使ったら相手に伝わりやすいかなど、今の状況を自分で把握しないといけないので、社会人基礎力の一つである状況把握力を身に付けられると思います。

本校の3年生からは、課題研究という3年間の集大成として、専門力・探究力をさらに高める授業があります。今年の3年生の取り組みを一つとってみますと、今月の高知新聞でも紹介されていましたが、農福連携で、地域の農園で障害を有する方たちと交流しながら、多くの気付きを得ることができたと聞いています。就労支援施設南国にしがわ農園の方が、本校食品ビジネス科の3年生にグアバの栽培方法を教え、グアバを使った無添加の

パンケーキやアイスを共同開発した取り組みです。

最後に、理想的な学校の姿です。一つ目は「年齢・学校関係なく、いろんな人と関われる学校」で、そのために月に何回か他校や他クラス、他学年の人と一緒にカードゲームなど遊びを通してコミュニケーション能力を身に付けて、たくさんの人を知っていくことができる機会が必要だと考えました。

次に二つ目は「受けられるから受けたいと思える授業」で、授業では先生の話を少しだけ聞いて、それぞれが自分なりに理解してから、グループになって教え合い、みんなと協力して、頭に定着できるようにできたらいいと思います。みんなと協力して問題を解決していくことは楽しく、聞いているだけの授業より授業を受けたいと思います。やはり、授業に限らず何に対しても主体性は大切なので、主体性を育むためにも、こうした授業が当たり前になればと思っています。

三つ目は「体験型の授業に力を入れる学校」で、自分の目で実物を見たり実践することで、より理解することができると思います。

しかし、授業で学ぶものの実物を全て見せることはできないし、実験の施設を増やしたりすることは難しいと思います。そのため、端末の操作でリアルに実験や、立体的にリアルな実物を見ることができるようなアプリを作ってもらいたいと思いました。

私は小さいころから母の調理を手伝うことが好きで、将来は食に関わる仕事がしたいと思い、高知農業高校の食品ビジネス科を志望しました。現在、高校2年生で進路について真剣に考えなければならなくなっています。しかし、どんな進路にするかはまだ分かりません。体験型の授業に力を入れることで、自分の興味のあることを見つけることができ、自分の進路のヒントを見つけられると確信しています。以上で私の発表を終わります。

(司会)

坂本委員、ありがとうございました。

まさに今日の場合もそうだと思いますが、さまざまな学校や年齢の方と関わる場と、そして、受けさせられるのではなく、主体的に受けたいと思える授業が実施されている場、そして、端末なども活用しながら体験型の授業に力を入れてくれる。こういったようなところが実現できているのが理想的な学校の姿と、そのようなご発表をいただいたかと思います。

それでは、高校生の委員の皆さま、ただ今の坂本委員のご発表につきまして、感想ですか、またご質問などがある方がいらっしゃいましたら、手を挙げていただければと思いますが、いかがでしょうか。じゃあ、石原委員お願いします。

(石原委員)

まず、たくさんのコースとか、あと学科とかに分かれて授業を受けることができるというところが、将来的な選択肢が増やせて、いい学校だなと思いました。

年齢とか学校関係なく、いろんな人と関われる学校が理想的な学校の姿だと思うんですけど、課外活動とかを通したら、人との交流をもっと深められると思いました。他に学

校が主体となっていて行っている課外活動とか、ボランティアは何かありますか。

(坂本委員)

ちょっと分からないんですけど、ボランティアは、ナツボラというものが配られたりして、自分もボランティアなどをして、個人的にやることはあるかと思います。

(石原委員)

分かりました。ありがとうございます。

(司会)

ありがとうございました。その他の高校生の委員の皆さまで、何かご質問・ご感想があれば、田中委員お願いします。

(田中委員)

高校のコースとかは専門のいろんな分野があるというのは、とてもアカデミックで、個人的に興味深いと思いましたが、アプリを作るという提案があったと思いますが、食品ビジネス科という視点で見たとき、どういうアプローチができるんですか。

(坂本委員)

実験など、とても多かったら分かりやすくなると思っているので、アプリで操作したら、前に立体的な実験装置などが出てきて、動かしながら実験が実際にできるようなアプリができたなら、すごい授業も分かりやすくなるし、楽しくなるだろうなと思います。

(田中委員)

ありがとうございます。

(司会)

他、いかがでしょうか。では、小松委員お願いします。

(小松委員)

どのような実験を体験してみたいなと思いますか。

(坂本委員)

例えば少し高価な機械を使わないと作れないものや、昔にしかない機械を使わないと作れないものなどがあれば、アプリで立体的に作れるようなことはしてみたいと思います。

(司会)

よろしいですか。ありがとうございます。では、澤田委員。

(澤田委員)

変えたら良くなるところに、他学年や他校との交流というものがあると思いますが、私たちはゼミ活動で他学年と交流することがある一方、他校と交流することがほとんどなく、他にも県内に農業高校などがあると思いますが、その県内の農業高校の人とやりたいと思うことなどはありますか。

(坂本委員)

県内の農業の人とやりたいことは、やはり一緒に協力して作業したり、勉強だけじゃなく、実習なども一緒にできたら、会話する機会やコミュニケーションなど取れるので、それは増やしていけたらよいと思います。

(司会)

よろしいですか。ありがとうございます。高校生の委員の皆さま、ありがとうございました。

それでは、高校生の委員以外の皆さまからのご感想等がございましたら、いただければと思いますがいかがでしょうか。永野委員、お願いいたします。

(永野委員)

教育委員の永野です。坂本委員、発表ありがとうございました。

坂本委員は、直ちに農業高校の学び方開発プロジェクト長になっていただきたいと思うぐらい、たいへん切実に自分の学びをしっかりと見つめて、こういった学び方をすれば、自分が社会に出て貢献できるのではないかとこのところにつながっているのではないかと、そういう発表ではなかったかと思います。

その中で、学校の中でどういうふうに学んでいけば、そういった未来に向けて自分の姿が出来上がっていくかということなんですけども、それは変えたら良くなること、①②全て、ここで表現されているんじゃないかと思います。

私が、ちょっと誤解していたんですけど、実業学校と言われる学校ですから、もっと皆さんが実学的に楽しんで、様々な実験や作業を勉強なさっているかと思っていたんですけども、やはり最初に講義式の授業がある、そういう授業などからも脱却していきたいということだったんですね。ですから、どういった学びを1年間でしていけばよいかというのは、先ほどもありましたが、教科書を目の前にしたときだけ、あるいは授業をする場面だけ考えるのではなくて、例えば1年間に学ぶプログラムがありますが、それを全体的に俯瞰をして、この1年では、このところは徹底的に話し合いをする授業にしてもらいたいとか、あるいは実務に関する授業を先生と一緒に作り上げていきたいとか、これも理想なんですけども、話し合いができるような場面があったらいいかと思います。

例えば大学では私は実際行ってもいますし、いろんな先生もそうなんだろうけども、カリキュラムのガイダンスが最初にあって、1年間こういうテーマで、こういう授業をす

るから、皆さんはこういう準備をしてくださいという、そういった時間もあります。ですから、ぜひ高校の方でもきっとあると思うので、先生といわゆる学ぶ内容と、学ぶ時間帯などの話し合いができれば、全ての授業がそうはなかなかいかないと思いますが、インパクトのある、実学的な学びもできていくのではないかという、本当に勝手な思いですがしています。

もう一つは、社会に出たら異なる年代の方といろいろな交流が必要だということと、同じように学んでいる友だち同士、学校種は違うけれども意見交換をして、自分のスキルを高めたいという提案、お考えなんですけども、大いに賛成です。例えば水産高校で捕ったお魚を地域還元するのは水産高校だけでなく、皆さんの教室の中でもできるのではないかなとか、あるいは春野高校で作ったお花を、皆さんが作ったお花と兼ね合わせて、どこかで提案するとか、何かしら共通のテーマを持って一つ仕上げてみましょうということができればいいですね。

それは、やっぱりこうしたいという強い思いがないと、先生方だけの汗かきでは無理なので、皆さん自身がこんなふう楽しんで交流もしていきたい、あるいは異業種の方ともそうですよね。いろいろな世界の方々と付き合いたい、付き合っている世界を広めたい。そうすると、やはり待っているだけでは駄目なので、アプリの場合もそうかもしれませんが、専門家を呼んで挑戦して作ってみよう。授業だけでは、ちょっと無理ですとなったときに、どういうふうに時間を作るか。そんな工夫など、さまざまなハードルがあると思いますので、できたら一つでもいいから、そのハードルを打ち破って、何か1年に1個作れるような皆さんのパワーを期待したいと思います。

まとめられませんけども、本当に今日の発表は、私も一つ勉強になりました。ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。その他、ご出席の皆さまから何かご感想・ご質問ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは改めまして、坂本委員に皆さま、拍手をよろしくお願いいたします。

それでは続きまして、高知若草特別支援学校の小松委員にご発表をお願いできればと思います。

◎高知若草特別支援学校 小松 璃沙委員

高知若草特別支援学校高等部3年の小松璃沙です。これから発表したいと思います。よろしくお願いします。

私はテーマを「ゆとりのある学校」として準備を進めました。まず、高知若草特別支援学校の良いところは、生徒同士の交流が多いところです。お互いが顔見知りです。丁寧な挨拶ができます。また、生徒数が少なく授業や生徒会活動、行事の中で生徒同士の意見交換が多かったり、高等部は小規模で手厚いサポートがあるところです。

もう少し詳しく紹介します。生徒会活動では、全校生徒の交流の場を企画し準備したり、

体育祭の競技・役割分担など、生徒同士で意見を出し合って決めています。

高知商業高校との交流では、車椅子の使い方や風船バレーなどの競技のルールを生徒同士で教え合い、交流を深めたり、それぞれの学校紹介を生徒たちで工夫して考え、それを通して自分の学校のことを考えるチャンスや、コースの異なる学校のことを知る機会にもなっています。

また、サポートの面では、自立活動という特別支援学校特有の時間があり、腕や足のマッサージなど、体のケアを中心に実施する時間や、日常生活の改善や、卒業後の過ごし方などについて、個々の実態に応じて細やかに指導してくれます。また、車椅子のメンテナンスなど、安全面にも丁寧に配慮してくれます。進路指導については、個々の事情に応じて、希望を丁寧に聞き取ってくれたり、体験や実習先を一緒に考えてくれるなど、手厚いサポートをしてくれます。

まず、私たちの日常で時間がかかることは、お手洗いや階段、廊下の移動、エレベーターの待ち時間などです。

こちらは、若草の校時表です。若草の休み時間は2時間目以外は5分で、下校時間は3時20分となっています。若草の良いところを生かしながら、もっとゆっくり活動したいのですが、現実はなかなか厳しいということが分かりました。

次に、休み時間が短く、下校時間が早くなる理由を調べてみました。

まず、式典や体育祭などの行事を全校で一緒に実施していたり、学習支援員や一部の教員が他学部間で授業に行っていることや、スクールバスの運行は分校の生徒も乗車したり、小中高の生徒が一緒に利用するなど、活動内容の異なる小中高の時間表を合わせなければいけないということが分かりました。学部の事情に合わせて校時表を作成できないので、下校時間を遅くすることは難しいことが理解できました。

次に、若草の変えたら良くなる場所について説明したいと思います。

授業間の休み時間を5分から10分、さらに昼休みを50分から60分、下校時間の延長など、時間的なゆとりが持てれば、次の授業の準備や友だちとの雑談など、焦らずゆっくりできて、心身ともにゆとりが生まれます。

次に「やりたいことに余裕を持って取り組める学校」について説明したいと思います。さらに、時間の調整と合わせてカリキュラムを見直すことで、自分の進路に合わせて選択の幅を広げることができるのではないかと考えました。そうすることで、文化的な活動や体育祭、生徒会行事といった時間を今よりも確保することができ、充実した学校生活を送ることができると思います。そうすることで、若草の良いところをさらに充実させられ、個々のやりたいことにも応えられるのではないかと思います。

そこで、他の特別支援学校の時間割やコースなどについて調べてみました。こちらは、東京都立水元小合学園の時間割です。若草とは違い、午前・午後に3時間ずつ勉強するという時間割になっています。その分、工夫されており、給食の時間を含め昼休みの時間が長いことが分かりました。

また、第2学年からは進学クラスと就職クラスに分かれており、自分の進路に合わせて

コースを決めることができるようになっていました。さらに、スクールバスの下校便は3時45分であり、個々に合わせて、ゆとりをもって生活ができる仕組みが整えられているなと思いました。若草もこのような形で時間割を作ることができれば、ゆとりもできて、それぞれに合った学校生活を送れるのではないかと思います。

ゆとりのある学校には何が必要か、今回、時間とカリキュラムに着目して考えてみましたが、他にもいろいろなゆとりがあると思いますので、意見交換の時間に皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

最後になりますが、私の考える理想の時間割について発表したいと思います。

まず、1時間目にほぼ毎日自立活動を設定し、準ずる教育課程の生徒も、体の緩みや運動、生活や社会に関する学習の時間を過ごすことは、心と体の両面でウォーミングアップになり、生活自立の訓練にもなるのではないかと思います。

次に、月曜日の4時間目は、生徒たちで主体的に活動するための時間です。この時間を「じゆ^{まな}プロジェクト」と名付けて、この時間は比較的自由的な活動の場にしたいと思います。この時間は、生徒たちがテーマを決めて実行に移す時間で、個別学習や好きなことを探究したり、数人で企画運営をしたり、お互いに自由に学ぶ意思を尊重し合い、意見交換を通して、人との関わり方を身に付けることもできるのではないかと思います。

また、それらの企画を他の学部や地域の人に発信し、参加してもらえれば、人との関わりを広げ、参加者の思いが自らを彩り、高校生活が有意義になり、貴重な経験や思い出にもなるのではないかと思います。

改めて、若草の良いところ、少人数で意見交換しやすい環境という、この利点を生かして、先生方や地域も一緒になって楽しめるアットホームな学校こそ、本当の意味でのゆとりのある学校なのではないかと、今回の活動を通して気付きました。

これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

(司会)

小松委員ありがとうございました。個人がやりたいことをゆとりや余裕をもって取り組むことができる学校が理想の学校の姿であって、そのためにも時間ですとか、またカリキュラムなどを見直したらどうか。それによって生徒の皆さんが主体的にいろいろ考えて活動する、そういったような時間などを設けたりすることで、地域の方々も一緒になって、充実した学校生活を送れるようになるのではないかと、そのようなご発表をいただいたかと思います。

それでは、小松委員からの投げ掛けも先ほどございましたけれども、高校生の委員の皆さま、ただ今のご発表について感想やご質問等ありましたらいただければと思いますが、いかがでしょうか。石原委員お願いします。

(石原委員)

若草特別支援学校は生徒数が少ないことなどが私の通っている檮原高校にすごく似てい

たり、あとは手厚いサポートとかだったり、他の学校と比較して、自分の学校のカリキュラムを比べてみて、ゆとりのなさという説得力を持った発表ですごいいいと思いました。

そこで、ちょっと疑問に思ったことがあるんですけど、生徒同士の交流の場というところがあったと思いますが、例えば全校生徒の交流の場は何かあったりしますか。

(小松委員)

例えば全校集会という、全校が一緒に集まってスポーツなどをして交流を深める機会が年に1回ほどあります。

(石原委員)

ありがとうございます。

(司会)

ありがとうございました。その他の委員の皆さまいかがですか。澤田委員、よろしくお願いします。

(澤田委員)

感想になるのですが、私たちも中高一貫校で、中学生の時間割と高校生の時間割ってところで難しい部分とか、行事の部分で中学校と高校の連携をどうするのかなど、中高一貫校とか、学年の幅広い学校の悩みというところを、他の学校の時間割とか入れながら、どうしたいというのを本当に自分で考えられていて、これからどうしていきたいというのを明確に言えているので、すごいいい発表だったなと思いました。ありがとうございます。

(司会)

ご感想、ありがとうございます。他の委員の皆さまいかがですか。では、坂本委員、お願いします。

(坂本委員)

同じく感想になるんですけど、学校は授業する場でもあると思いますが、コミュニケーションの場だとも思うので、車椅子とかだったら移動などで友だちと話す時間などが削れてしまうと思うので、休み時間を延ばすのは難しいかもしれないけれど、休み時間を延ばすことができたなら、もっといい学校になるのではないかと自分も思いました。ありがとうございます。

(司会)

ありがとうございます。その他いかがでしょうか。よろしいでしょうか。ありがとうございます。

高校生の委員の皆さま、ありがとうございました。

それでは、高校生の委員以外の皆さまで、ご感想等ございましたらいただければと思いますが、皆さまいかがでしょうか。森下委員、お願いいたします。

(森下委員)

教育委員の森下です。小松委員さん、ご発表ありがとうございました。休み時間が短く、下校時間が早くなる理由というところの中では、澤田委員さんもお話されていたんですけども、しっかりなぜそれがこういう現状にあるのかということをきちんと分析をされた上で、他の学校がどうなっているかいうところを、しっかりと探究をされていました。その中で改善案を提案されているという中で、しっかりと探究型の思考ができているところがやはり素晴らしいと思いました。これは小松委員さんだけではなく、今まで発表されていた委員さんも本当に素晴らしいと思って聞かせていただきました。

その中で、坂本委員さんが他校との連携についておっしゃっていましたが、高知若草特別支援学校の方は、もう既に高知商業高校さんとの連携、一緒に交流されているというお話もされていて、そういう意味では本当に他校との交流というのは、いろんなことでできるのではないかと思います。私、ちょっと不勉強で、実際にやっていたことを知らなかったのも、実際にやられているというところでは素晴らしいと思いました。

さまざまな障害がある方々と交流することによって、例えば食品なんかも、どのような食品形態が必要に、どういうふうなことを考えないといけないのかという、本当に幅広い視点でお互いに学び合えると思います。それも少しコロナでなかなかできなかったところが、少し機会も広がるでしょうし、今、Zoomなどウェブの環境もあるので、ぜひこういうことを広げていくことによって、多様な価値観や多様な生き方などの理解につながっていくのではないかと思います。

高知国際高校も若草に多分近いと思うので、例えば障害のある方への関心を持っていられる生徒さんは、積極的に交流を持たれて、課題を共有して、一緒に解決策を考えるなどということも本当にできるのではないかと、すごく私自身も学ばせていただきました。

少し私自身も感想になりましたけれども、ぜひこういうようにお互いが交流し合い、そして、さまざまな地域への発信というところを、ぜひ、高校生の視点でしていただくと、本当に私たちも学びになるなということを、改めて気付かされました。

本当にご発表をありがとうございます。

(司会)

ありがとうございました。その他、皆さまいかがでしょうか。

それでは改めまして、小松委員に皆さま拍手をよろしくお願いいたします。

それでは続きまして、土佐塾高等学校の田中達仁委員にご発表をお願いできればと思います。ご準備が出来次第お願いいたします。

◎土佐塾高等学校 田中 達仁委員

土佐塾高校2年の田中と申します。これから「高知県と英語教育」というテーマでお話をしていきたいと思います。

まず、目次で大きな3つの柱のお話をしていきたいのですが、まず土佐塾高校のいいと思うところ、そして変えたら良くなると思うところ、今私の思う理想の学校という順番でお話をしていきます。

まず、いいと思うところで ICT 教育と生徒主体の考え方というものを挙げてあります。

ICT 教育についてですが、学習方法の効率化がありますが、まず土佐塾では、生徒や教員がそれぞれ iPad を持っています。それが、例えば英語の授業であれば、ラジカセを用いて、教室でみんなでリスニングの授業をするというものがあるのですが、そこでリスニングの音源を配信することで、いつでもどこでも聞くことができ、いわゆる個別最適化ということになって、とても良いかなと思います。

それだけでなく、Google ホームというサービスを活用して、選択肢や入力欄に入力して回答を送信するとすぐに結果が出ます。出ることで採点の手間が省けて、余った時間を他の学校活動に当てるという工夫もできるので、いいツールだと思っています。

次に、ポータルサイトですが、行事だったり出欠連絡だったりテスト範囲なども、一括してすべて見るができるサイトで、生徒や教員、保護者など、みんな使うことができます。個人的に、バスの運行時間を見られることがいいと思っていて、今までは掲示板に足を運ぶ必要があったので、その手間が省けてとても便利だと思います。

次に、生徒主体の考え方というところですが、土佐塾では制服のジェンダーレス化など、いろいろな取り組みがありますが、個人的にはこれを挙げたいと思います。

まず、土佐塾はご存じのとおり山の上にあるので、放課後、友だちとご飯を食べに行こうといったことが、なかなか難しい生徒もいます。自分もその部類に入るのですが、そういう生徒のために学校が始めたイベントが、このキッチンカーイベントです。実際、とても生徒からの評判は良く、大いににぎわっています。

本題に入りますが、変えたら良くなると思うところで「生徒の持つ苦手意識」というものを挙げたいと思います。

英語についての話をさせていただきたいのですが、よく友だちと話していると、日本人だし英語いらないし、別に海外旅行へ行く予定もないからという声がよくあるのですが、それには言語の壁というものを感じている、関わっていると思っています。言語の壁とは何かというと、結論から言えば、結果にすぐ現れにくいということです。例えば他教科と違って、英語は単語を覚えたからといって、長文が読めるかと言われたらそうでもないですし、それは、英語がコミュニケーションツールだからということがあるので、言語活動が必要だと。次に、例えば单元ごとになっていないところがありますが、数学などであれば、单元ごとに受験などで問われるので、点は取りやすくなるのですが、英語はそういうものがないので、複合的な力がその分必要になってくる。これが言語の壁としてあって、それが故に英検を敬遠しがちであるというのが現状です。

これだけじゃなくて、このテーマを選んだ理由でもあるのですが、高知県の外国人観光

客と宿泊数を見たときに、12万4,980人という全国では40位に当たる少ない数ではあるのですが、その増加率は135.8%とコロナ前から大幅なアップがあり、東京都に次いで全国2位という数字を出しています。人数だけでなく、船の寄港数を見てみると、確実にコロナ前よりも大幅にアップしています。

この状況を鑑みて、高知県はこれから国際色が豊かになっていくだろうと推測できます。さらに実生活でも英語のスキルは必要になっているということを鑑みて、提案があります。大きく二つで「英語教育の強化・向上」と「英語外部試験の奨励」です。

まず一つ目の提案ですが、英語に触れる機会を増やすということがありますが、これは全国でも英語教育の水準が高い福井県にならっていきたいということで、後で、細かくお話をします。

留学に関する支援ですが、そもそも留学の機会を与えるというと、経済的に難しい家庭を支援するというものと、留学生を県内の学校にどんどん受け入れていくというものです。

先ほど言った福井県の英語教育実施状況調査の結果なんですが、ここから注目したい内容を三つピックアップしたものがこれです。

ICT機器の活用で、これは土佐塾でもやっているようなものにはなるのですが、今後キーになってくると思います。コミュニケーションを重視した授業改善ということで、これは先ほどの英語の使用率の目標の設定というものに当たるかと思います。教員採用試験における外国語資格の利用ですが、これはまた細かくお話をしていきます。

外部試験の奨励ですが、やはり外部試験というものは受験のツールとしての印象が進学校では強いというのがあるのですが、そうでない学校でもやはり英語の実力の可視化という点で推奨をしていきたいと思っていて、TOEICなどいろいろありますが、英検は特に目標にしやすいので、取得率の目標の設定とかもしていけたらいいと思います。

教員採用試験での利用ですが、一般的に英語科の教員は準1級が欲しいというように言われているので、ここには指定の級とあるのですが、準1級以上がないと採用しませんと言ってしまうと、マイナスイメージで母数が下がっても仕方がないので、準1級以上があれば、こういう還元がありますというようにすると、さらにプラスで、インセンティブが増えるかと思います。ここには給与アップというものがありますけど、そこには課題があり、検定料や会場の課題があります。僕は、実際2級をこの間受けたんですが、準会場で安い方ではあるものの約7,000円かかるので、個人としても家庭としても出費は大きいかと。先ほど言ったような準1級以上であれば1万円は優に超えてきますし、準会場ではそもそも受けられないので、検定料など会場の手助けがあればいいと思います。IELTSに関してはそもそもの受験会場が高知にはないです。

目指していきたいサイクルですが、今まで挙げたようなICTの活用であったり、作業の効率化で生徒に注視できるということがあれば、きっと英語ができるというように持っていけるかと思います。では、できるようになれば実力を可視化してみようということで、検定を受けていく流れがあると思うのですが、そこで検定料だったり、会場だったりがあるというような工夫があれば、さらにいいかと思います。そこで受かることができれば、

自信はもちろんつくと思いますし、英語を生かす仕事に就こうかという将来の選択肢にも入ってくるかと思うので、より良いかと思います。

それが県の教員で、さっきの還元があるようなことがあればより良いかなと思います。本人もそうなんですが、教員のモチベーションや動機づけにもつながっていけば、より工夫がなされていくと思うので、このサイクルを目指していきたいと思います。

最後に、改めて提案で「英語教育の強化・向上」と「英語外部試験の奨励」を提案したいです。参考文献はこちらです。

以上です。ありがとうございました。

(司会)

田中委員、ありがとうございました。

生徒の皆さんの苦手意識という点に、まず着目をされ、また本県の社会的な状況として外国人の宿泊者数や寄港の数も多くなっているという、主張の背景となるグラフなどもお示しをいただきながら、高知県の英語教育に焦点を当てていただきまして、英語教育の強化・向上と、また英語の外部試験の奨励という提案につきまして、授業や留学や、また先生のモチベーションも含めての先生の採用試験の方法等々も含めての具体的な施策・取り組みについてご提案をいただきました。また目指したいサイクルをお示しいただいたというご発表かと思います。ありがとうございました。

それでは、高校生の委員の皆さま、ただ今の田中委員のご発表について、感想やご質問等がありましたら、いただければと思いますが、いかがでしょうか。石原委員、お願いします。

(石原委員)

感想になりますが、ICT 教育という学習方法やポータルサイトなど、とても先進的な学校で、よいと思いました。

また、具体的なグラフや表を用いて、理想の学校の根拠を強化して、とてもいい発表だと思いました。僕も英検などを受けたりますが、やはり英検の費用などはすごく高いです。そこは、すごく分かるし、いろいろ同感できる場所が多かったと思います。ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございます。

(澤田委員)

発表の中に、ポータルサイトというところで、テスト範囲など、私たちも iPad を利用してクラスルームなどで発信されているのですが、一気に見ることができるのですごくいいなと思いました。

また、英検の話にもあったように、私たちも国内大学を目指す人たちは英検でもよいの

ですけれども、国外を目指す人たちは IELTS など、そういう試験を受ける必要があるのですが、高知県内では受けられないという点も言っていて、私たちも受けないといけないし、スコアを伸ばしたいのに受けられない、費用が高いので遠慮してしまうというところは私たちの問題でもあるので、すごくありがたい発表だったと思います。ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございます。その他、高校生の委員の皆さま。坂本委員、お願いします。

(坂本委員)

感想になりますが、さっき言っていた「できる・受かる・うれしい」のサイクルはすごく成り立っていると思っていて、自分も英語があまり得意じゃなくて、英検とかも落ちたらすごく落ち込むけれど、英検のサポートなどがあったら、また受けたいと思しやすいので、それはすごくよいと思いました。

(司会)

ありがとうございます。他、よろしいですか。高校生の委員の皆さま、ありがとうございました。

それでは、高校生の委員以外の皆さまで、ご感想等がありましたらいただければと思いますが、いかがでしょうか。弥勒委員、お願いいたします。

(弥勒委員)

教育委員の弥勒です。田中さん、本当にありがとうございました。非常に分かりやすく、そしてものすごく熱い思いが伝わってくるような発表だったと思います。

特に本当に便利なポータルサイトなど、土佐塾高校はすごく ICT をフルに活用しているということも分かりましたし、とても便利なツールとして活用されているということが分かりました。

英語の学習ということが一つのテーマになっていて、私も随分前に、昔の英語教育というものを受けました。今のように「聞く・読む・話す・書く」の4種類をバランス良くという形ではなく、リーディングとライティングがメインだったんです。ですので、話すことと聞き取ることは普通の高校まで勉強していて、あるいは大学でも、そんなにそういった能力が身に付かなかったというのはよく覚えています。

今、もう英語の教育そのものの考え方は大幅に変わってきていると思いますが、やはり多くの日本人は未だに英語に対するコンプレックスを持っていると思います。私自身は仕事でも英語を使いますが、最初にしたのは、30 歳くらいで僕は結婚したんですけれども、ハネムーンでオーストラリアに行ったんです。オーストラリアに行ったときに、やはり、そこそこ片言でもいいから、とにかく英語が話せて本当に良かったと思いました。

グローバルというか、世の中はもう、世界幅広く、仕事でも遊びでも、日本だけで暮ら

しているだけではもったいないと、そういう世の中になっていると思いますので、英語だけでもできていれば、大半のところでは用が足りる。かつては多分、他の国に行ったら、全ての国の言葉を学ばなければいけないという時代だったかもしれませんが、今は英語ができれば大半の国で、そこそこ用が足りるという、ある意味、便利な世の中になっているんです。ですから、英語の勉強は、仕事の面でもそれからプライベートの面でも、ものすごく自分自身の世界が広がりますから、そういう意味で多くの人に、多くの若い人たちに、そういった動機付けを持ってもらいたいと思います。

最近、いろんな意味で誘惑が多いですね。例えば勉強よりもゲームをやっていた方が楽しいとかです。いろんな誘惑があると思うんですけども、それでも、やはりなぜ勉強するのかという、勉強の根源的なことが、いかに皆さんの将来の人生を豊かにする最初の一步なのかということを確認するだけでも、他の誘惑に負けずに、勉強に多くの時間を注げるようになるのではないかと思います。

そういう意味で、いろんな形で外部試験の奨励とか、英語教育の強化、留学に関する支援、それぞれにそういった支援がもっともっとあれば、どういう家庭の状況でも多くの機会が与えられることになると思いますので、素晴らしい発表だったと思います。

すみません、ちょっとまとまりがないですけども、田中さんの発表は、本当にいい勉強になりました。ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。その他よろしいでしょうか。教育長、お願いします。

(長岡教育長)

県教育長の長岡でございます。どうぞよろしくお願いいたします。田中さん、発表ありがとうございました。ご提案をいろいろいただいて、少しそれについてお話をしておかなければならないのかと思ひまして、お話をさせていただきます。

まず、田中さんから今回いろいろなご提案をいただいて、その中の幾つかはもう既に我々の方としても実施しているところがございます。

例えば留学生への支援とか、それから、教職員に対して英語のいわゆる級を目標にしてもらう。例えば準1級は、高校の英語の先生には、もう必ずお取りいただきたいとか、そういったような指定もさせていただいて、先生方には頑張ってもらいたい。それから、採用試験についてもそうです。そういう一定の資格を持っている方については、やはり多少なりとも優遇をするということも実施しているところであります。

ただ、英検全てに対して支援をしているかということ、そこはまだできていないので、その点については、また検討もしていかなければならないと思います。本当にありがとうございました。

その上で一つ、田中さんに言っていた、それから弥勒委員からもお話があったわけですけど、やはり英語が使えるということについては、これからの社会にとっては必ず必要だと、もっと言うと、自分自身の社会、自分自身の世界を広げていくことにもなるし、

これから仕事をしていく上でもやはり必要なものである。そのように多分皆さん考えておられる、あるいは感じておられるところだけでも、高校生だけに限らず中学生も含めて、まだまだ英語に対する苦手意識とか、学習意欲というのが高まっていないところもあります。

その辺りで、田中さんだけに限らず皆さんにお伺いするんですけども、多分英語は必要だと思っておられるけれども、これの学習をどの程度真剣にされておられるのか。そういったことを少し、それぞれの現状からお話をいただけたらありがたいなと思っています。これがあればさらに英語の勉強しますよというようなことも含めて、お話をいただけたらと思います。

(司会)

まず、田中委員いかがでしょうか。

(田中委員)

おっしゃっていただいたように、やはり社会には必要だと自分の実感もあります。実体験として、街を歩いていたときに外国人の観光客の方に道を尋ねられたことがあって、先ほど言っていたような片言ではあったんですけども、なんとかコミュニケーションを取って、自分としても英語を話せないといけないなという実感はありました。実際、観光客もヨーロッパの人だけではないんですけど、共通語としての英語というのはやはり重要だと思うので、必要だと思います。

モチベーションへのつなぎ方というのは、先ほどおっしゃっていただいたようにゲームなどにも関心が強いので、いわゆる、いろんな言語学習アプリというのがあるように、ゲーム感覚でやれるというようなものも、ちょっとずつ社会に出てくるかと思うので、デジタル化じゃないですが、そういう面で、英語学習につなげていけたら、さらに良いかと思分は思います。

(司会)

ありがとうございます。もうお一方ぐらい英語教育について、石原委員、お願いします。

(石原委員)

私も一応、中学までは東京に住んでいて、東京には外国人の方がすごく多くて、本当に1日に何百人、何千人ぐらい見るくらいなんですけれども、やはり英語を話せないといけないという実感がすごくあって、でも、外国人と話す英語って、学校の授業は文法とかを学ぶと思うんですけど、会話するコミュニケーション力というところでは、やはり学校の授業だけじゃ不十分なところがあると思うので、ALTの外国人の先生とかと、もっと話す交流を増やせたりとかがあったらいいかと思っています。

(司会)

じゃあ、澤田委員、お願いします。

(澤田委員)

私は、DP コースという国際バカロレアのコースに所属していますが、とても人数が少なく、英語の時間にも4人のコースなので、そこに1人先生、外国の方がいるので、とても日常的に話さないと授業が回らないし、英語を使って喋らないと授業は進んでいかないので、そういう英語を使わないといけないという場面を設定するとか、私たちのように、私たちはちょっと特別というか、コースなので、教科書が英語だったりするので、必然的に使わないといけないという状況にあると、私たちもすごく勉強しないといけないし、社会に出ても役立つということは身に染みて実感できるので、ALTの先生を増やすとか、そういうコミュニケーションをしないといけないという場面を増やせると、もっといいのかと思いました。

(長岡教育長)

いろいろとありがとうございました。英語に親しむ、あるいは英語を勉強する。そういった環境に整えていくというのは、我々教育委員会の務めであろうと思いますので、これからそういった点については頑張ってやっていきたいと思います。

そして併せて、やはりこれからの社会に出て、社会の中で独り立ち、自立する、あるいは社会を発展させていく、そのためには、やはり英語というのは必要だと思います。これをいかに自分のものとして勉強していくのかということは、皆さん方個々にも関わっていると思います。そういう意味で、学校の先生、そして生徒の皆さんが、そして教育行政が一緒になってこの力を伸ばしていけるとと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

(司会)

ありがとうございました。それでは、皆さま改めまして田中委員に拍手をよろしく願いたいと思います。

それでは、最後に、橿原高等学校の石原委員にご発表いただければと思います。ご準備ができ次第お願いいたします。

◎高知県立橿原高等学校 石原 憧真委員

橿原高等学校3年の石原憧真です。これから、次世代総合教育会議の発表を始めます。

まず私が最初に思った、あるべき理想の学校の姿は「誰もが不満を感じることなく 社会に出ていくための力を身につけ人間として成長できる場」だと思います。この話題を研究する前に、まずは私が通っている橿原高校のいいところを紹介したいと思います。

一つ目は「少人数体制の授業形式で教員と生徒の距離が近い」ことです。生徒数が他校と比べると少ないのですが、そこからさらに授業を受ける人数が、教科によっては、成績や学習進捗の状況によってさらに少人数になります。その結果、教員1人が見ることができる生徒数の割合が少なくなり、意欲的に授業に参加している生徒が多い傾向にあります。

二つ目は「自然などの橿原町の魅力を生かした総合的な探究の時間」があるところです。橿原町は、こんな感じでとても自然豊かな場所です。また、シカやイノシシ肉などのジビエを使用した料理やお菓子を作る産業班。棚田で作物を育てる環境・観光班。SNSなどを駆使して、橿原の魅力を広めるPR班。橿原の伝統文化である神楽を行う文化班という四つのグループに分かれます。この活動を通して、橿原高校生は地域に根ざした体験型授業を受けることができ、今後のキャリア形成の助けになります。

三つ目は、大阪や東京など「さまざまな場所から生徒が集まるため、多文化的な学校」とも言えるところです。先ほども言ったように、私は実際に中学時代までは東京に住んでいて、高校進学を機に橿原町に越境留学をしているのですが、はじめは、方言や習慣などいろいろな違いを知ることができて、驚かされることばかりでした。また、親元を離れ、自立した寮生活で慣れないこともたくさんありました。しかし、橿原町の方々には外部から来た人にも優しく、寮はとても清潔に管理されていて、橿原高校に入学するまでに抱えていた不安はすぐになりました。橿原高校に入学して、両親のありがたみを知った私は、たくさんの友人や先生方に囲まれながら、多様な価値観に触れることができ、橿原町に来て本当に良かったと実感しています。

こんないいとこづくしの橿原高校が、私が考えていた理想的な、あるべき学校の姿に近づくためには、学校に存在する生徒の不満や悩み、疑問の種である問題の解決が大切だと考えました。

そこで、私は社会で生きるために必要な規範意識を身につけるためのものでもあり、生徒の不満の種にもなり得る校則について着目しました。私は生徒会長を務めていた時期があり、そのときの活動の一環として、当時の教頭先生から橿原高校の校則には、あいまいな点が多く、古く、時代遅れで、多様性を感じられないといったことや、多文化で多様な価値観がある橿原高校だからこそ、生徒と教員で校則に対しての認識に差があるのではないかという議題が挙がりました。

そこで、理想的な学校の姿を目指す第一歩として、校則の共通認識を生徒と教員が持つ必要があると考え、早速、全校生徒と先生方に向けて校則の認識についてのアンケートを取りました。アンケートの結果、まず、橿原高校の校則には、原則として、カラオケは保護者同伴のもとでしか行ってはならないというものがあるのですが、生徒の中には、この校則を知らなかったり、不満を抱えている者が一定数いました。

このことから、校則についての認識のずれがあることが分かります。また、ジェンダーレスの視点で言えば、高知国際高等学校でも許可されていると思いますが、年々、他校の女子高生のズボン着用率は上昇していますが、橿原高校の校則では、未だに許可されていないといった多様性を感じられず、古いのではないかという認識があると、再確認することができ、今の校則を改善した方がいいという意見が多数でした。そのため、この認識のずれを生徒が主体となって、教員と橿原高校ならではの地域が一体となって協力し、校則の解釈をすり合わせることで、第一に必要なだと思いました。

このように、みんなが多様性を認め合える学校が、あるべき学校の姿だと新しく気が付きました。そして、多様性を認め合うことが理想の学校を目指す取り組みになると考えました。生徒としては、この多様性を認め合うことで、成長にもつながる学びを得ることができて、様々な活動においてアイデアを増幅することにもつながり、より多様で多文化的な学校ができあがると思いました。

以上で発表を終わります。

(司会)

石原委員、ありがとうございました。

理想的な学校の姿として「誰もが不満を感じることなく社会に出ていくための力を身につけ人間として成長できる場」であるとお示しをいただいた上で、その実現に向けた前提として、解決すべき学校の課題としての校則に焦点を当てていただいた。そういったご発表をいただいたかと思います。

そのような多文化で様々な価値観が存在する中で、校則について、生徒や教員間での認識に差があって、それを教員や地域の方々も、当然、生徒の皆さんも協力して解釈をすり合わせていって、よりよい校則に変えていくといった過程を通しながら、多様性を認め合える学校となっていくといったようなご発表をいただいたかと思います。ありがとうございました。

それでは、高校生の委員の皆さま、先ほどのご発表についてご感想、またご質問等をお聞かせいただければありがたいんですが、いかがでしょうか。澤田委員、お願いします。

(澤田委員)

一つ質問をしたいんですけども、私たちの学校でも、やはり校則についてという議論は何回も、生徒総会の後などにします。私たちの学校では、やはり生徒会というのが、校長先生、副校長先生、教頭先生と話し合うという場面が設けられるのですが、やはりどうしても、すごくラフな話し合いとは少し遠いというか、堅い話し合いというふうになってしまって、私たちの言いたいことが本当に言えているのか、校長先生とか教頭先生のちょっと話を聞くという、私たちの場面、時間の割合的にそういう場面が多いと思っていて、どうやって教員、先生方と話し合いを進めているのかとか、生徒の意見の出し方をどうしているのかということを知りたいと思いました。

(石原委員)

ありがとうございます。まず、檜原高校は先ほども言ったように少人数なので生徒と先生の距離が近いということがあり、さきほども教頭先生と一緒にラーメンを食べてきたのですが、そういう面で言ったら、すごく生徒と先生が固くなく普通に会話できて、校則の解釈のすり合わせをしやすいかと思います。

ただ、生徒会の活動では、校則のことだけじゃなくて、他にも球技大会の運営だったり、卒業式などもあったりとかで、いろいろな行事の運営もあるので、時間的な余裕がなかなか

がなく、校則の改善の話はあまり進められていない感じです。

(司会)

ありがとうございます。よろしいですか。では、坂本委員、お願いします。

(坂本委員)

感想になりますが、あるべき学校の姿で、社会に出ていくための力を身につけ人間として成長できる場となっていて、勉強も大切だけど、校則で制服などを自由にしたり、人間として成長できる場というのも大切だから、すごくいいと思いました。

(司会)

ありがとうございます。その他、委員の皆さんいかがですか。小松委員、お願いします。

(小松委員)

構原高校のいいところで、生徒と教員の距離が近いという点があったと思いますが、若草も生徒と教員の距離が近かったりするので、すごく共感するところがありました。ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございます。それでは、田中委員、お願いします。

(田中委員)

感想にはなるのですが、校則などいろいろな認識のずれを生徒が主体となって解消しようとするというところで、地域が関わってきていると思うのですが、学校と地域が協力して解釈をすり合わせるというのは、何かとてもいいと思い、学校に限らず政治とか民間企業などで地域との連携は大事だと思うので、そういう地域が関わっていくというのはとても大事だと思っていて、自分も学校とかに反映できるものがあれば、その意見を持ち帰りたいなと思いました。

(司会)

高校生の委員の皆さま、ありがとうございました。

それでは、高校生の委員の以外の皆さまで、ご出席の皆さまからご感想等ありましたらいただければと思います。

(池委員)

教育委員の池です。よろしくお願いします。まず、石原委員さん、たくさん学校がある中で構原高校を選んでいただいて、入学していただいたことは本当にありがとうございます。また、生徒会長もしていただいているということで、学校の活性化に大いに役立って

いるんだと感じます。

構原高校は寮も含めて、構原町から多大なご支援をいただいて、県外留学生を受け入れたり、あるいは地域外から生徒がたくさん来たりということで、少人数指導も徹底して行なわれている中山間地域のモデル的な学校です。そこで学んでいただいていることは、本当にまず感謝したいと思います。

テーマが校則ということでございました。校則というのは、かなり裁判にもなっていて、判例が出てます。校則というのは法令の規定はないのですが、学校が教育目的を達成するために、必要かつ合理的な範囲の中で、校則を制定して、児童生徒の行動など一定制限を課することができるという判断になっています。それと、校則を定めるのは学校経営者である校長とされています。

ところが、この校則というものは、随分昔にできたものが多く、今、社会、時代が流れて変化が激しいし、それから多様な価値観が生まれている中で、昔のままでいいのかという部分、それから、必要かつ合理的な範囲の定義がどうなのかという話をしたときに、校則を見直そうという動きは、全国的にも機運が高まっているという状況にあると思います。

その中で石原委員さん、まず教職員と生徒のアンケートを取って、意見を聞いてみようという試みをしたということは、非常に、第1歩が踏み出せたな、見直しの第1歩を踏み出せたなという感想を持っています。その中で、立場が違えば意見が違ったりすることがあるということが分かったということが、まず一つ、勉強になったと思います。ただ、この後のステップが大切で、どうやって教職員の方々と向き合って、話し合いをして改善に持っていくかということが大事になってくると思います。ただ、国際の澤田委員さんもおっしゃったように、対等の立場ではないので、少し議論を進めるのは難しいかも分かりません。

そういう点では、学校運営協議会というのが、やはり構原高校にもあると思うのですが、そこで議題にさせていただくとか、あるいはPTAの方々から意見を聴取するとかいうことも含めて、学校と話し合いを進めるということで、少しでも改善につながっていくのではないかと思います。

石原委員さんも社会に出られたら、こんな場面は、一杯出てくると思います。校則に限らず、立場が違えば意見が違うということの形が出てくると思います。だけど、これから生き抜くためにはどうするかと言うと、やはり丁寧に会話をし、平行線で終わるのではなく、少しでも改善策を話し合えるような状態にしていくということが、すごくいい社会勉強に、今回の校則の見直しについても、なったなと感じています。

在校中にぜひ、校則が少しでも改善されたら嬉しいと思うし、もし改善ができなくても、後輩たちにつないでいただいて、改善につながれば、石原さんがやったことが、すごく功を奏したという形になると思います。本当にありがとうございました。

(石原委員)

参考になる意見をありがとうございました。構原高校にこの意見を持って帰って、校則をまた改善できるように頑張ります。ありがとうございます。

(司会)

意気込みをありがとうございます。その他、このことにつきましてよろしいですか。知事、お願いいたします。

(濱田知事)

石原委員さん、本当に素晴らしい発表をありがとうございました。私からは、感想的なものと併せて、少しこの問題に関連して、皆さんにご意見をお聞きしたいことがあります。石原委員さんのご発表は、特に校則が古いままで多様性が認められていない。具体的にはカラオケなどの例が出ていたと思いますけれども、それに加えて、澤田委員さんから、やはりこの校則、制服の話で、女性が今までスラックス不可だったのが、ようやく話し合いをした中で認められて、それは多様性の表れとしていい方向なんじゃないかというお話がありました。

それに関連して、普段私が思っていることから、皆さんが何かご感想があれば聞かせていただきたいのですが、高知県は人口減少が一番悩ましい問題になっていまして、若い方々に選んでもらえる高知県になっていかないといけない。特に若い女性が一旦都会に出ると、なかなか帰ってきてもらえないという実態もあるので、特に女性が居心地がよくないとか、先ほどのお話で多様性を認められてなくて、高知へ帰るより都会にいた方がいいやと思われている節があれば、いろんなところで変えていかないと考えています。

そのヒントとして皆さんにお聞きしたいのは、今学校の校則の許可の中で、例えば制服のスラックスのお話がありましたけれど、特に男だから、女だからということで決まりがあって、それが今の時代、あまり合理的じゃないんじゃないかとか、もっと多様性が認められていいんじゃないかというように感じておられるようなところが、もしあれば教えていただくと、私がいろいろなことを考えていく上で、ヒントをいただけるかなと思いましたので、もし何か気づかれた点があれば、適宜教えていただければと思います。

(司会)

いかがでしょうか。澤田委員、よろしくお願いします。

(澤田委員)

私が思っているのは、女子のスラックスを導入するということであれば、別にもう校則において男女の差というものが要らないのではないかと考えていて、別に男子がスカートを履いていてもいいし、女性がスラックスを履いていいなら男子もスカートを履いていいと思います。私は学校の校則の中で「男子は」という言葉とか「女子は」というのはなくても、別に髪型だって男子は、女子はと言われなくてもいいと思うので、校則の中で、学校で統一していればいいと思うので、女子・男子という校則の男女の差っていうのが、なくなってもいいんじゃないかと思います。

(司会)

その他、高校生の皆さま、いかがでしょうか。坂本委員、お願いします。

(坂本委員)

さっきの話と似ていることになるかもしれないのですが、髪型で男子はちょっと長かったら切らないといけなかったり、女子は長くても大丈夫など、差があったりして、それはちょっと、多様性って考えたら、長い髪にしたい男子もいるかもしれないから、そこは区別をつけなくて、一緒に判断で校則にしたらいんじゃないかと思います。

(司会)

もう一方ぐらい、どなたか。

(小松委員)

私も制服であったり髪型だったりとかは、規則を決めなくても自由に選択できるように、そういった機会が広がれば、もっとよりよい社会になっていくのではないかと思います。

(司会)

ありがとうございます。よろしいですか。

(濱田知事)

どうもありがとうございました。校則はまさしく学校のルールですので、これは校長先生をはじめ先生方、あるいは今、学校運営協議会のお話がありましたが、生徒さんがもちろん主役ではありますが、取り巻く校長先生、先生方、また地域の方々、皆さんの話し合いの中で方向が議論されて、最終的には校長先生のご判断で決まっていかれるというものだと思います。今そういった形で、率直な話をいただけたのは、私も大変うれしく思います。

ですから、何でもこういう校則が必要かということをつつと話し合う機会が、またいろんなところで持たれて、その上で、皆さんの納得・理解を得られながら、少しずつでも前へ進んでいくという方向で、ぜひ、高知がよくなったらと思います。そういう話し合いの機会が、対話が全てのスタートだと思いますので、そういう形で、学校の中でもいろんなチャンスが生まれてくることを、私としても、権限は教育委員会になりますけれども、希望したいと思いました。ありがとうございます。

(司会)

ありがとうございました。それでは、石原委員に皆さま、改めて拍手をよろしくお願ひいたします。

それでは、以上で全て委員の皆さまからのご発表をいただきました。また、活発な意見交換、ご質問、感想等もいただきました。ありがとうございました。改めて、委員の皆さま

ま全員に対して拍手をお願いできればと思います。

ありがとうございました。それでは最後に教育長、また知事から、各委員のご発表、ご感想等、総括をいただければと思います。教育長、お願いできればと思います。よろしくお願いします。

(長岡教育長)

高知国際高等学校の澤田さんは、新しい学び方を学ぶというお話をしていただきました。実際に、これからの変化の激しい社会においては、今知っていることや今の当たり前がそのまま続くわけではない。そういう意味で新しい価値観をつくったり、あるいはこれから出てくるであろう新しい困難を克服していく、そんな力が必要になってくると思います。そういう意味で、いわゆる知識だけを学ぶのではなくて、学び方を学ぶというのは非常に大切なことだろうと思います。そういう学習をしてくださっていることは、非常にうれしく、頼もしくも思ったことです。

そして一つ、そういう学びをしているからこそ、ぜひ、完璧な環境条件というのはなかなかないと思うんです。不完全な状況の中において、その困難点をどういうふうに克服していったらいいのかということを、今の学びを使って、ぜひ解いていただけたらありがたい。我々も、一生懸命環境を整えていこうと思いますけれども、ぜひ、生徒の皆さんのお力も貸していただけたらと思います。

そして、高知農業高等学校の坂本さんにおかれては、体験型の授業を取り入れたらどうかというお話をいただきました。自分の身体を通すことによって、そういった知識や技能は、自分のものとして、あるいは生きて働くものになってくるということだと思います。全くその通りだと思います。そして、ただ言えるのは、世の中のこと全て実体験することはできないので、そういう意味で、お話にあったように ICT を活用するということもあろうかと思います。

そして、もう一つ大切なことは、やはりそれを単に覚えるだけではなくて、そういった知識や出来事を、自分の頭でこれは本当なのか、何がいいのか、何が悪いのか、自分の頭で考えてみる、ただ受け取るだけでなく。そうすることによって、自分の考えができて、それを人に話してみる。それも素晴らしい体験だと思いますので、そういった学習も取り入れていただけたらありがたい。

ただ一つ、子どもたちが受けたいという授業をどのようにつくるのか。これが教員の本分であるわけですから、単に子どもたちに聞かせるだけの授業をやっていたらいけないと思います。そして、生徒の方も、ただ単に楽しい、面白いというのではなくて、いわゆる頭の脳みそが汗をかいて、頭の筋肉を使って考える力をつける。そんな授業が必要になってくるだろうと思います。ぜひ頑張ってください。

それから、若草特別支援学校の小松さん、ありがとうございました。小松さんの論理の立て方が、自分の感情とか感覚のみではなく、自分自身を振り返りながら、さらに他と比較して、自分自身のところはどうかと客観的に眺める。その上で違いを明確にしていくところが非常に素晴らしかったです。併せて、森下委員のお話からもありましたけれど

も、なぜそうなっているんだと。なぜなんだというのを繰り返し繰り返し考えていくことによって、物事の本質に迫ることができることだと思います。ぜひ、これからも学んでいただきたいと思います。

そして、土佐塾高校の田中さん、先ほど、英語について少しお話をさせていただきました。本当に英語については、これからどうしても必要な力であろうと思います。ぜひ、英検1級を取った暁には、どんな勉強をしたのかということを報告に来ていただけたらと思います。そして、やはり田中さんの論理の進め方も非常に素晴らしかった。根拠を持って、さまざまなデータを基に、自分の言いたいことを述べる。そういう表現力というのは非常に素晴らしいものだと思います。ぜひ、これからも頑張ってください。

そして、構原高校の石原さん。まず最初に、多様性を認め合うというお話がありました。例えばそれは自分の考え方と違う考え方も、あるいは価値観も認めるということがあるかと思います。そのためには、自分と何が違うのかということを見極める。そして、その違う価値観を体験したり、理解したりする力が必要だろうと思います。

実際、石原さんは都市部の方から地方の高知県、そして、自然の多い構原へ来てくださった。まさに、今までと違う価値観がある地域へ、自ら進んできて、これを体験してくれたということであろうと思います。非常に多様性を認めるこれからの社会の、まずリーダーになる素質があると思います。ぜひ頑張ってください。

併せて、不満のない方が、これはみんないいと思います。ただ、不満のない社会というのは、これからもないと思います。そういった意味で、不満を不満として置くのではなく、これを克服する。これをどういうふうに解決していったらいいんだということを考えて、人と話し合って、協力し合って、行動して、不満を解決する。そのような力をぜひつけていただけたらうれしく思います。ぜひこれからも頑張ってください。

全体的に本当に素晴らしいご提言をいただいた。それをぜひ、我々として考えていきたいと思っています。本当に今日はありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。それでは、最後に知事から会議の総括をお願いします。

(濱田知事)

今日は5人の高校生の委員の皆さんから、本当に素晴らしいお話をいただきましてありがとうございました。皆さんが示されたあるべき学校、理想の学校の姿のキーワードの中から三つ、私なりにまとめて、こういう学校を皆さんは求められているんだろうというものを受け止めとして、コメントしたいと思います。

一つは、やはり主体的な学びが求められていると思いました。探究の学習であったり体験型の学習、あるいは校外との交流だったり地域との交流。そうした形で主体的な学びを大事にしたいということではないかなと。言い換えると、必ずしも自分が勉強をしたいということでもなく、やらされているというような話もありましたけれども、やらされている的な面がなくはないということの裏返しかもしれませんが、そうした主体的な学びを

大事にしたいというのが、皆さんの一つのコンセプトではないかと思います。

二つ目は、やはり自分らしさを大事にして、個性を大事にした学校、そういうことであってほしいという思いが皆さんに共通しているんじゃないかと。キーワードとして多様性だったり、ゆとりだったり、こういったお話をいただいたというのは、まさしくそういうことではないかと思いますし、これを裏返して言うと、今の学校が一人一人の個性を全て尊重するということでは必ずしもなくて、ある程度、一律的な指導ということを、ある意味せざるを得ない部分もあるというところの裏返しで、こういうご意見、理想の姿が示されたと思いました。

三つ目の私のまとめとして感じましたのは、皆さんやはり時代はどんどん流れて、新しい時代になっているので、新しい時代に即した学校であってほしい。例えばグローバル化に対応して英語教育の実施であったり、ICT への活用であったり、あるいは石原さんが言われた自然豊かなというのも、こういうキーワードかもしれません。脱炭素が求められている時代でありますから、これも裏返していうと、今の学校の教育というものが、時代の流れに十分に追いついていけなくて、昔のままで残っている部分もあるものを、皆さんフラストレーションに感じておられるのかなというような受け止めも、できなくはないと思います。

そうした意味で、皆さん本当によく時代の流れも見て、また学校の実態、学校というのは社会の縮図という面もありますから、見ていただいて、あるべき学校の理想像というのを考えていただいて、発表いただいたのではないかと、大変感謝をいたしております。社会全体も我々の先祖の皆さんからずっと引き継いできたものでもありますし、学ぶということは、ある意味、語源としては「まねる」ということだと思います。今の大人たちがやってきたことを、まずは真似て勉強してもらって、その上で変えていくべきことは変えていくということが、社会全体が変わっていく大きな方向、流れということだと思いますので、そうした意味で、皆さんの理想の学校像が、一足飛びに実現するというのは、なかなか難しいのかもしれませんが、本日のような対話を通して学校で、そして社会でキャッチボールをしながら、時代の流れに沿って、あるべき学校の方向に変えていくということが、我々としても、それをサポートしていくのが大きな責任ではないかと思います。

そうした意味で、また教育委員さん方と私どもの総合教育会議も、年何度か定期的開催していくことになりますけれども、本日いただきました皆さんの意見、理想の学校像、大きな方向性はしっかりと頭に入れさせていただきながら、その中で、どう学校をよくしていくかという観点に立って、我々も意見交換をし、そして、これからの県政にも傳承させていきたいと思います。今後ともいろんなことにご関心を持っていただいて、また意見を言うべきときは、手を挙げていただくということで、ぜひ一緒に高知を、多様性のある、そして、人に認められる、いい若者に選ばれる高知にしていきたいと思いますので、皆さんも、今後ともご協力いただければありがたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。それでは、以上をもちまして次世代総合教育会議を閉会させていただきます。本日は、委員の皆さま、本当にお疲れ様でございました。ありがとうございました。以上とさせていただきます。